

## 【一般演題2】 第9席

## 「『甲乙經』卷之三にみられる刺灸法の量的考察」

神奈川 上田 善信

古代中国医学における鍼灸治療について記載されたものを見ると、穴の部位、穴の主治證とともに刺鍼の深さ、施灸の壮数つまりその刺激量も重要な要素である。その刺激量については鍼法、灸法それぞれの基準といえるものがみられるが、主治證をみても刺灸法の指示があるものは非常に少ない。その刺激量がどのように関連し合っているのかを知ることは重要なことと思う。

隋唐以前の諸文献や出土文物の記載では鍼法或いは灸法のどちらかに偏っており、十分な資料とはいえない。しかしその中にあって『甲乙經』卷之三では現在使用されている経穴の大半が記載されており、各穴ごとに刺鍼の深さ及び留鍼の呼吸数、施灸の壮数がまとめて示されている。伝承されている最古の鍼灸専門書である『甲乙經』は重要な資料であるにもかかわらず、直接研究の対象として扱われたことがほとんどない。しかし、この問題を考察していくうえで最良の資料である。そこでこれを整理し、鍼法と灸法の関連を探ることにより、古代中国における鍼灸治療の刺激量について考察を行う。